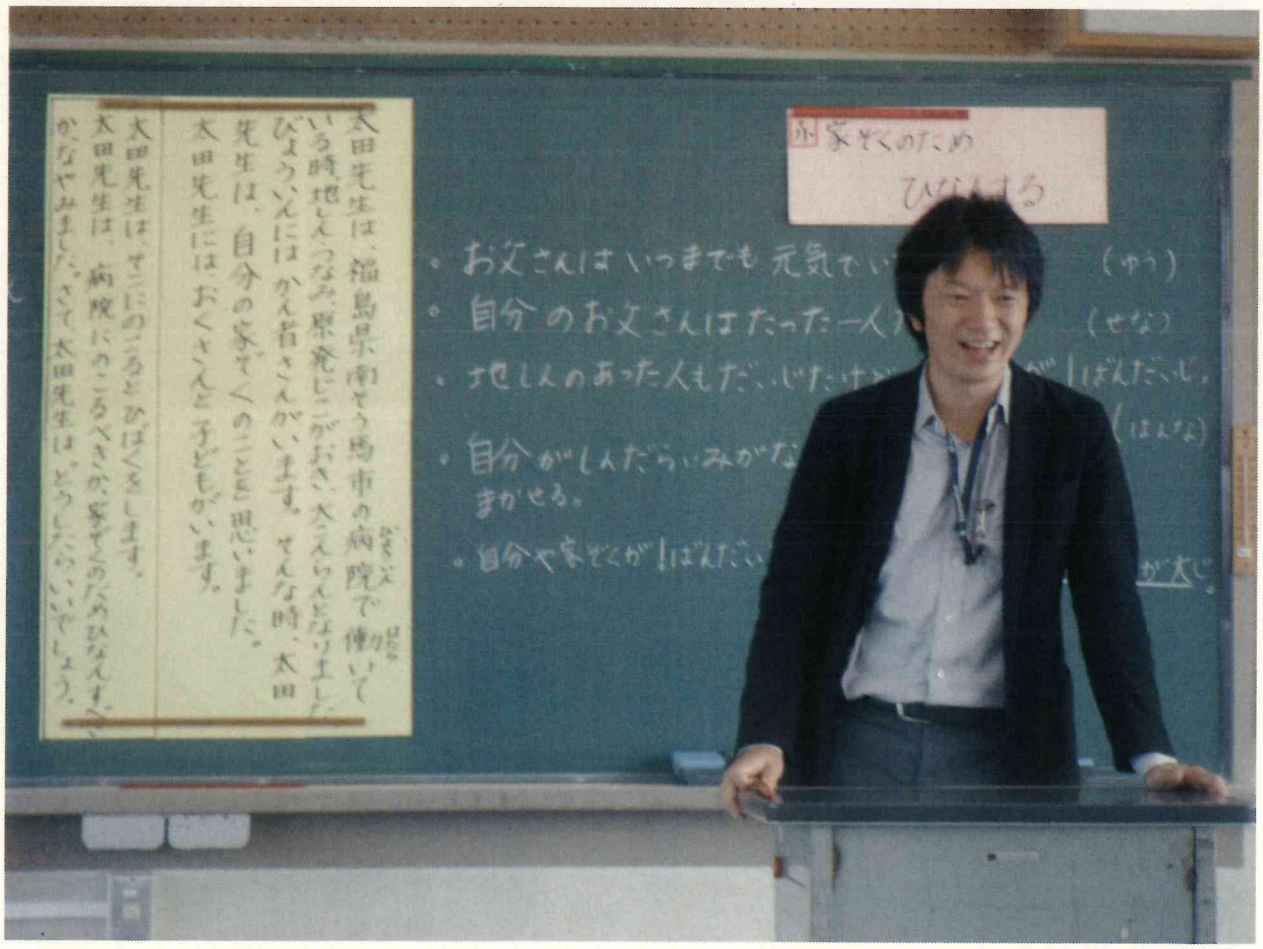
まごころ宅配便

安城市立錦町小学校
２年梅組学級通信
平成 28 年 11 月 4 日（金）
NO. 3

―輝く命　未来に向かってはばたこう―

東日本大震災後の被災地を支えた
医師・太田圭祐先生を迎えて



「生活科　未来に向かってはばたこう」

２０１１年３月１１日の東日本大震災で、地震、津波、原発事故に襲われた南相馬。当時、放射能の恐怖のなか、「安全」と「危険」の境界線で生命を救い、地域医療を守るために闘った医師・太田圭祐先生を錦町小学校に迎えました。太田先生は２年生の子どもたちに授業を、そして２年生～６年生を対象に講演をしてくださいました。とても深い内容で、子どもたちも私たち教師も心を揺らす授業でした。今日はそれを振り返ってみたいと思います。

「太田圭祐先生プロフィール」

２００６年３月　愛媛大学医学部卒業
２００８年４月　社会保険中京病院救急救命科脳神経外科レジデント
２０１０年７月　南相馬市立総合病院脳神経外科医師、リハビリ科医師
２０１１年４月　名古屋大学附属病院脳神経外科医員

・２０１１年３月の東日本大震災で、地震、津波に加えて原発事故に襲われた南相馬。放射能の恐怖のなか「安全」と［危険］の境界線で生命を救い、地域医療を守るために闘った医師。
・著書「南相馬１０日間の救命医療」

太田先生は、東日本大震災時、津波・原発事故による被曝の恐怖の中で南相馬市立総合病院に残り、治療を続けた方です。病院のスタッフの多くは家族のために避難した人が多く、残った人は１割程度だということです。子どもたちにその状況を話し、「太田先生がもし、自分のお父さんだったらどうしてほしいか」というテーマで考えてもらいました。子どもたちの考えは次のようなものです。

１０月１９日（水）の授業

「赤　家族が一番大切なので、避難してほしい」（赤い帽子をかぶっている）

・早く避難してほしい。そのわけは、もししょうらいお父さんがガンになってしまったら家族が心配する。
・お父さんはたった一人で大事な人。お金もなくなってしまう。習い事で困る。
・お医者さんだから、元気でずっと治療した方がいい。お医者さんはほかにもいっぱいいるけど、お父さんは一人。
・お母さんは赤ちゃんが生まれるときで、仕事に行けないから。
・将来、子どものお父さんが病気になったらこまる。子どもが育つには、お父さんとお母さんの二人が必要だと思う。（この意見は、松組の子から出ました）

「白　病院に残り、治療をする」（白い帽子をかぶっている）

・医者が仕事なのに、帰ったら男らしくない。
・家族の人の命より、病院の人の命の方が数が多い。
・お医者さんになるのが夢で、それをせっかくかなえたのに、家族のことを一番に考えて帰ってしまうのはおかしいと思う。
・子どもが大きくなったとき、お父さんがその病院で患者さんを残して帰ってしまったら、

尊敬できないと思う。
赤・白どちらの子にもそれなりの根拠があり、話し合いは深まりました。みんな真剣に考えていることがよく分かりました。そこで太田圭祐先生に登場していただきました。
（太田先生は、この話し合いを教室で実に楽しそうに聞いていらっしゃいました。）

１０月１９日（水）第２限

「東日本大震災後、原発事故の被災地を支えた医師・太田圭祐先生のお話」

・３月１１日午後２時４６分、大きく長い揺れが起こりました。病院の中はぐちゃぐちゃで、カルテが散乱していました。
・その後、津波が起こり、病院から見た景色はがらりと変わりました。夜になると食べ物はなく、自動販売機もからになりました。
・そんななか、病院には次々と病気やけがをした人が数えきれないほど運ばれてきました。多くの人は身元が分かりませんでした。
・スタッフの多くも家族が被災し、連絡が取れない人も多くいました。それでもできる限りの治療を全力で行いました。
・その後、福島第一原発で事故が起こりました。南相馬市は、半径２０キロ圏外の安全地域であるが、すぐ隣なので、今後危険区域が広がる可能性があり、とても不安でした。
・スタッフの多くは家族の安全を考えて、自主避難する人もいました。しかし、家族のことを考えてのことなので、その判断が間違いだとは言えません。
・私自身は、心の中で家族に（ごめんね）と言いながら、南相馬の病院に残りました。
・周辺の放射線濃度が高くなり、自分たちのいる「半径３０キロ圏内においても屋内退避」という指示が出ました。
・放射能の粉は一度体の中に入ると、決して出ることはありません。どんどんたまっていきます。息をしても入ってくるのです。それはとても怖いことです。
・そんな恐怖と闘いながら１００名ぐらいの人を助けました。自分にできる精一杯のことをしたと思います。
・病院では患者さんを他の安全な病院に移すようにしていました。
・そして、入院していた妻に子どもが誕生しました。「そうま」と名づけました。
・私は自分の命よりも大切なものがあることに気付きました。そして、それを守らなければならないことにも・・・。それは、家族の命と患者さんの命です。
・熊本県でも大きな地震が起きました。愛知県も今後大きな地震が起きる可能性が８０％と言われています。「自分の命は自分で守る」ということをよく覚えておいてください。そして、家族で地震が起きたらどうするかということもよく話し合っておいてください。

太田先生のお話を子どもたちはすいこまれるように聞きました。そして、帰られる前、梅組に来ていただき「群青」という歌を歌いました。この歌はＮＨＫ「心の時代」で紹介されました。被災した小高（おだか）中学校の小田美樹先生の担当する生徒が卒業前に詩を書き、先生が作曲した歌です。私は「心の時代」を見て感動し、冬休みを待ち、小田先生を福島県に尋ねました。新幹線の福島駅構内で３時間お話を聞きました。ＣＤが発売されています。この歌を子どもたちに紹介したところその状況をよく理解し、太田先生に聞いていただこうと毎朝、「朝の会」で練習しました。（この中に太田先生が治療した中学生がいるかもし

れないと子どもたちは感じた）ではその詩を紹介しましょう。太田先生は当時を思い出すかのようにしみじみと聞いてくださいました。

「群青」

ああ　あの町で　生まれて　君と出会い
たくさんの　思いだいて　いっしょに　時を過ごしたね
今　旅立つ日　見える景色はちがっても
遠い場所で　君と同じ空　きっと見上げてるはず
「またね」
と手を振るけど、明日も会えるのかな
遠ざかる　君の笑顔　今でも忘れない
あの日見た　夕陽　あの日見た　花火
いつでも　君がいたね
当たりまえが　幸せと知った
自転車をこいで　君と行った海
あざやかな記憶が　目を閉じれば　群青にそまる

あれから２年の日が僕らの中を過ぎて
３月の風に吹かれ　君を今でも思う
響け　この歌声　響け　遠くまでも
あの空の彼方へも　大切なすべてに届け
なみだの後にも　見上げた夜空に　希望が光ってるよ
僕らを待つ　群青の街へ

きっとまた会おう　あの町で会おう
僕らの約束は　消えはしない　群青の絆
また　会おう　群青の街で

（福島県　小高中学校　作詞　小高中学校３年生　作曲　小田美樹）